

## 36 成熟仮説

**成熟仮説 (maturation hypothesis)** とは子どもの言語獲得過程を説明する仮説の一つである。この仮説によれば、子どもの身体が遺伝的に組み込まれた情報を元に発達するように、子どもの言語も生得的にプログラムされた言語発達情報に従って発達する。例えば子どもが生まれてから順に座り、立ち、歩けるようになるのと同様に、子どもは喃語を話し始め、1単語を発し、やがて複数単語を発話するようになる。

発達順序（タイムテーブル）は先天的に決まっており、ある一定の年齢に達すると成熟し予め定められた特徴や能力が発達する。このことから成熟は多少の経験は必要とされるが、経験や環境の違いに影響を受けにくいとされている。成熟時期は年齢に基づいて規定される。

成熟仮説では、成熟によって普遍文法 (universal grammar) に関する統語的な知識が、予め遺伝的に規定されている順序に従い発達するとされている。これは、子どもは獲得初期から普遍文法の知識を利用可能だがその全てが子ども文法には反映されないこと、また未成熟時の初期状態と成熟時の最終状態は構造が異なることを意味する。この仮説を使えば、普遍文法の一部の獲得が遅れることの説明が可能になる。

成熟仮説の提案は、どの言語を獲得している人間の子どもであっても、以下に提示する成熟段階を通過するという点で共通はしているが、大きく2つに区分される（Osawa 2000 参照）。

第1に成熟は普遍文法の原理に影響を与えるという立場である。この立場はさらに2つに分かれる。例えば、Felix (1984) によると、全ての普遍文法の原理は未成熟で獲得初期の子どもは利用不可能なため、この時期の子どもの発話は普遍文法の許容範囲外であるという。これに対して、Borer and Wexler (1987) は上記の立場と異なり、子どもの発話は全て利用可能な普遍文法の許容範囲内であるとしている。普遍文法の原理は最初から利用可能であるが一部は利用制限があり、それらは成熟により利用可能になるという主張である。例えば、受動態の獲得に関しては、英語を獲得している子どもは動詞を使用した受動態の文を6歳以降にならないと獲得できないという。これは受動文を構成する際に、動詞の直接目的語を主語位置に移動することによって形成される項連鎖 (argument chain/A-chain) というものが未発達であることが原因で、成熟により利用可能になるという。項連鎖の能力の成熟年齢は5歳ごろとされている。また次に述べる成熟仮説とは反

対に、獲得初期の子どもの文法には**機能範疇 (functional category)**があるという主張をしている (Wexler 1994, Rizzi 1993/4 参照)。子どもは機能範疇を含む定形文と含まない不定形文を混在して発話するからである。獲得初期から子ども文法に機能範疇はあるが、全ての主節には時制や補文標識といった機能範疇が義務的に必要であるという知識・原理は欠けており、これは約2歳6ヶ月で成熟により発達するという。

第2の区分は、普遍文法の全ての原理を子どもは獲得初期から利用可能であり、発話は普遍文法の許容範囲内であるという点で Borer and Wexler (1987) と同じだが、成熟は機能範疇に影響するという立場である (Radford 1990, Tsimpli 1996)。つまり獲得初期の子どもは**語彙範疇 (lexical category)** しかない。成熟段階は3つに区分される。最初は前範疇段階 (precategorial stage) で一語文が使用される。年齢は20ヶ月以前である。次に20ヶ月前後 ( $\pm 20\%$ ) になると子どもは語彙段階 (lexical stage) に入り2語文を話すが、文は動詞や名詞といった内容語に限定される。最後に24ヶ月前後 ( $\pm 20\%$ ) で機能段階 (functional stage) に入り、時制形態素などの機能語を使用し始めるという。

普遍文法を生得的と仮定すると子どもと大人の言語知識は理論上、同質であることになる。しかし、両者には差が観察され「大人文法 - X」 = 「子ども文法」と言える。Xが両文法知識の差である。そこで成熟仮説では、Xが成熟を通して段階的に付加又は選択され大人文法に達すると考える所以である。

Xは大人文法では成熟しているが、子ども文法には未成熟の学習不可能で遺伝的な普遍文法の知識の一部と想定される。より包括的な説明のためには成熟で利用可能になるXは何で何個存在するのか、どの段階でXが成熟により発達し要因は何か、発達順序があるとすれば何か等を解明し、それらが言語の種類に関係なく全ての子どもの言語獲得過程に共通して当てはまる必要がある。

また成熟は経験から独立しているとはいえ、子どもは入力（経験）した言語を獲得するため言語経験は必要不可欠であり、さらにそれを学習するメカニズムも働いているはずである。故に普遍文法と言語経験、そして、これら2つの相互作用を説明する生得的な学習メカニズムの3つを考慮に入れた研究が今後は必要になってくる。

(関田 誠)